論議 リーフレット版

No.7 1987.10.18 定価 50円

〔編集・発行〕
共産主義者同盟(赫旗)首都圏委員会
〔連絡先〕太陽通信社
東京都新宿区西新宿7-3-10山京ビル503-201

プレ・Xデー状況に抗し，日帝の新国家主義――「86年体制」への統合攻撃に対し，根底的分裂と対峙を持ち込む

人民の共生・連帯運動の構築と前進を！

皇族の訪沖攻撃とXデー状況のはじまり

天皇ヒロヒトは、今秋、沖縄海邦国体への出席を、ついに断念した。もちろん、ヒロヒトの身体、生命がどうなろうと我々の知ったことではない。だが、この事態からひきおこされる政治的諸結果の意味についてはハッキリと把んでおかねばならない。すなわち、①ヒロヒトが、行こうと行くまいと、浩宮ナルヒト、皇太子アキヒトら皇族をつかって、沖縄人民に対する日帝国家権力（ヤマト）への体制的統合攻撃が行なわれ、また行なわれようとしていることである。そして②天皇ヒロヒトの死を目前にひかえて、すでにXデー状況が開始されたということである。最後に、③天皇ヒロヒトとこれを繰る日帝支配階級は、ヒロヒトの「生命をかけた」沖縄上陸。「慰霊」、体制的統合のドラマチックな政治効果を選択しなかった、ということである。

すでに9月19日、浩宮ナルヒトは反対の声を押し切って訪沖を強行し、翌20日、海邦国体夏季大会開会式で「沖縄は、心いたむ先の大戦の苦難を経ながらも」等という、天皇－皇族の戦争責任－戦後責任にほおかむりした発言を行なった。いったい誰が「心いたむ」のか？　なぜ「心いたむ」のか？　ナルヒトの祖父をはじめとした、自からの一族の現在の地位を守るために沖縄戦と、戦後の沖縄の苦難がもたらされたことは誰の眼にも明らかであり、にもかかわらずこうした発言を行なうことは厚顔無恥の極みといわねばならない。

さらに、この間、天皇の病気が公表され、訪沖の中止が、正式に決定され、きたる10月24日に、皇太子アキヒトが、ヒロヒトの代理として、「お言葉」を持って訪沖をすること等が決定されている。これら一連の策動が、ヒロヒトからアキヒトへの天皇位の交替のプロセスという、新しい要素つけ加えられるとともに、「①日本帝国主義と天皇の戦争－戦後責任の『清算』による、日帝の軍事大国化と天皇の元首化を狙うものであり、②1972年沖縄『返還』＝再併合（第3次琉球処分）以後の日帝支配と、日米安保体制の下でのアジア・太平洋圏における軍事的・経済的な侵略反革命の戦略的な基地としての役割の固定化をねらうものである」（リーフ No.6）ことになんの変化もない。

そして、ヒロヒトの病気報道以後、直接にXデー状況につながる、プレ・Xデー状況に入ったことが注意されねばならない。この間の「病状報道」が、権威主義的国家主義体制と、民族排外主義的統合のために日帝支配階級の完全な管理・統制下におかれていることは明らかであろう。そして、小出しにされる情報からしても、ヒロヒトの病状が極めて重篤なものであることが推測できる。従ってXデー状況はまさに眼前に迫っていると考え、これへの準備が急がれねばならない。数年間にわたる、天皇位の交替、「改元」の儀式の下で、国民の民族排外主義的

なイデオロギー的動員が行なわれ、これと結びついて、ソフト・ハードの権威主義的国家主義体制の一挙的な強化が執行権力の主導の下に強化されることが予測されている。労働者階級と被抑圧民族人民、被差別大衆の階級意識、民族的、人民的自覚への解体攻撃がいっそう強められるであろう。またこれに伴う、革命党・革命勢力への公然たるまた陰然たる白色テロルの行使が策動されていると見なければならない。こうしたプレ・Xデー状況、Xデー攻撃に抗して、労働者階級・人民の歴史的体験としてこれへの闘いを刻みつける努力を全力で実現しなければならない。

最後に、ヒロヒトも、日帝支配階級も、ヒロヒト自からの生命を賭けて、「慰霊」「行幸」を敢行する気などさらさらなかったこと（当然にも！）が、労働者階級人民にとっての歴史の新たな教訓として銘記しておかねばならない。沖縄戦の下、読谷村チビチリガマにおける集団自決の悲劇を奇跡的に免れることできた老人は、天皇訪沖の報道に接して「天皇が来るなら生命がけでこい」といったという。この沖縄人民の歴史的人民的意識から、「県」知事西銘順治の、天皇に「沖縄の戦後を終わらせて下さい」という倒錯した意識や、ヒロヒトの「戦没者の霊を慰め、長年県民が味わった苦労をねぎらいたい」（87年4月28日）という尊大で無礼な発言は、一挙に色あせるのである。まさに、例の1947年9月の「対米メッセージ」（ヒロヒト自身の身の安全と「国体護持」の為に、25年～50年以上の米帝による長期の沖縄占領を希望したもの）にして、今日のこの事態ありというべきであろう。

沖縄人民の闘いに呼応し、日本労働階級人民の反天皇闘争の前進を！

こうした激しい天皇・皇族を使った、差別－同化攻撃に抗して、沖縄人民の闘いは、極めて厳しい状況の中で、着実に前進している。「日の丸・君が代」攻撃に対して、今春、高校卒業式において、日の丸が生徒によって奪われ、ドブにつけて路上に放り出されたことは記憶にも生々しい。現在も、自治体、教育労働者、高校生によって国体における「日の丸」、「君が代」を拒否する闘いが粘り強くつづけられている。また今春以降、「天皇（制）を考える公開市民連続講座」が広汎な知識人、市民を結集して開設され、天皇主義との思想的対抗が蓄積されている。こうした闘いの中で、6月21日には、歴史的ともいえる2万5千人の結集によってカデナ基地包囲闘争が成功をおさめ、この成果をひきついで、県労協、仲教組、自治労県本、高教組、地区労からなる五者連絡協は、9月11日「天皇の戦争責任を追及し、国体の民主化を要求する労働者総決起集会」2300人を結集して、開催した。またヤマトにおいても、「天皇・日本軍の海邦国体参加に反対する沖縄人運動」が形成され、現地に呼応する沖縄人の決起と団結が、「意見広告」運動等を足がかりにつくられている。

こうした沖縄人民の奮闘に励まされ、ヤマトにおける労働者階級人民の反天皇・天皇・皇族の訪沖阻止の闘いも前進してきた。本年4月28－29日の闘いの中で「天皇訪沖阻止実行委員会」が結成され、ここに結集する労働者、学生、市民をはじめとした広汎な人士による反天皇の闘いが、全国的な広がりと、社会的深まりをもって形成・蓄積されてきた。我々はこの闘いの前進のために全力を注がなければならない。10－11月反天皇、皇太子訪沖阻止の連続闘争に決起しよう。

深化する日帝国家の危機の下、地域政治闘争を基礎として、今秋期労働者の政治決起を組織せよ！

こうした、沖縄人民の闘いをはじめとする反天皇闘争の経過は、我々に政治的決起の社会的、労働者的人民的基礎の重要性を我々に示している。沖縄人民の反戦・反基地・反安保、反天皇闘争の社会的、人民的基礎に学び、沖縄人民の民族自決権を支持するだけでなく、その自立解放闘争の社会的基礎に学ばなければならない。すなわち、沖縄人民の自立解放闘争に連帯する、ヤマトの労働者階級人民の自立・解放の内実が形成されねばならない。これは、政治闘争の人民的階級的基礎の重要性という一般的正しさの指摘ということにとどまらない。今日の情勢の政治・社会的激動と再編に関わる政治上の認識の問題である。

この観点から現下の「国家の危機」が、従来の危機論的レベルからではなく、政治分析、戦略・戦術の考察のために解読されねばならない。世界的、一国的な経済の危機が、「貿易不均衡」「為替戦争」「累積債務」等として、また「産業の空洞化」問題として指摘され、それら社会・経済的危機の政治的反映として帝国主義的国家再編が、「危機管理国家」の形成として指摘されている。我々はこの過程を、①「階級支配と国家権力の少数者への一層の集中」、②「帝国主義足下の人民の政治的自覚の買いとりと、被抑圧民族・人民の絶対的窮乏状態への固定化」、③「超越的存在への価値化」、④「資本主義社会のもとでの疑似的諸共同性の固定化、屈服」、とりわけ日本的現実に即していえば、③、④は「伝統的政治統合の精神的中核としての国家崇拝、天皇主義に他ならない」（リーフ№4）と指摘してきた。比喩的にいえば、産業、経済の空洞化に対応して、「政治の空洞化」が進行し、「国家正統化原理」の不在のままで、執行権力の肥大化と、その官僚組織の数千数万のパイプによって諸社会的経済的組織が、議会制民主主義の政治的統合を経ずに、直接に政治意思形成が行なわれるシステムーネオ・コーポラティズムが形成されている。だがこれは同時に国民多数の政治決定のプロセスからの実質的排除をもらさずにはおかず、それゆえ、国家権力は自己の正当化を自身によって、すなわち、国家主義そのものによっておこなわねばならない事態が、いうところの「国家の危機」に他ならない。

それゆえ我々は、この「政治の空洞化」、民主主義の衰弱に抗して生起する、新しい社会運動、現代的民主主義の諸運動に注目し、対抗社会・対抗権力の運動を社会的背景とした地域政治闘争の組織化を当面の戦術として重視するのである。労働者階級人民の政治的決起の可能性と条件は、逗子、三宅島の闘いに端的に示されるように行政の末端において形成されており、今後もこうした傾向は拡大するであろう。地域政治闘争として、今秋期反天皇、沖縄、三里塚、帝国主義的労働戦線統一＝「全民労連」結成反対等の闘いをとりくみ、その実践の中で、労働者階級の共産主義的中核隊伍をつくりあげなければならない。

こうした観点からするとき、現下の激動する労働戦線再編問題、とりわけ「左派ナショナル・センター結成」についての岩井提言に対する我々の態度も決定することができる。我々は左派の結集、団結に賛成である。だが、より実践的な態度決定を行なうためには「ナショナル・センター」が、国際労働運動の歴史の中でどのような役割をもって形成され、また今日どのような政治的位置をもつのかについての認識がととのえられねばならない。これについての我々の認識はまだまだ抽象的なものでしかなく、実践に学ぶことによってより具体的、本質的な認識へと深められなければならないが、世界資本主義の帝国主義段階への突入と、介入主義国家体制の下で、政党－労組構造が形成され定着してきたことをふり返るとき、「左派ナショナル・センター」が、その糸として形成されうると考えることには疑問がある。それは我々の非力はもちろんとしても、「左派」の力量の小ささ一般に還元できない。一国に併存するプロレタリアート人民のもうひとつの社会とその自立したシステムの形成が、ブルジョア階級独裁との対抗において展望されねばならず、そうした社会的基礎なしに「階級的ナショナルセンター」の構想は「左派」の「観念的産物」となる可能性が大きいのである。闘う労働者、労組の奮闘に敬意を払いながら、我々は、この国に対抗し併存するもうひとつの

社会システムの形成を展望しなければならない。もちろん、これは闘う労働者階級人民の団結の様々な試行によってしか達成されないのであり、現下の努力を客観主義的に見下す態度は、全くの誤りであることはいうまでもない。それ故、我々は、労組・活動家左派の総結集それ自体ではなく、「総評の消滅」という事態が強制する「左翼反対派からの脱皮」という転換期に際しての時代認識と時代を切り拓く主体的問題の解決こそ急がねばならないと考える。

今秋期闘争を、労働者階級の共産主義的中核の形成を基礎に，共生・連帯の対抗社会・対抗権力をめざす革命的政治路線獲得のための出発点とするために全力で闘おう！

『論叢』第４号・近日発売！　　定価５００円

情勢に切り込む党活動の基礎を固めよ　共産主義者同盟（赫旗）首都圏委員会

戦後日本国家の再編と権威主義的国家体制……大　村　章　彦

戦術問題についてのわれわれの見解（下）……鮎　川　まこと

自治体労働者運動とは何か・序説……早　川　礼　二

女性解放理論の現在・試論……女性解放会議